



崔恩景(チェ・ウンギョン)はステップスギャラリーのグループ展には何度か参加しているが、個展は初である。やはり個展が開催されると、そのアーティストの全貌を見渡すことができよう。当然、ギャラリーでの個展は新作や近作が中心となるので、そのアーティストの全てを理解することはできない。しかし、仮に巨大な美術館を使った回顧展であったとしても、その人の人生全てを理解するのは容易ではない。我々は自分のことすら判っていないのに、他人のことなど知る由も無いのだ。それどころか、他人に興味を覚えない輩もいる。現代美術作品に接することは自分以外の他人の存在を認め、百人百様の現代の人間を理解し、その中で自分とは何かを考える機運なのだ。人間は独りで生きている訳では、決してない。

ステップスギャラリーオーナー吉岡まさみのブログによると、崔は「崔さんは韓国ソウル出身。韓国の美術大学を卒業後、日本に留学。東京藝術大学の博士課程を修了。宇

野和幸さんと同窓である。その後韓国には戻らずに、日本で活動。今日に到っている。(中略)崔さんは、いわゆる抽象画を油彩やテンペラで描いてきたのだが、何年か前から、だんだん具象的な雰囲気が出てきていて、どうなのかなあ...と本人悩んでいたのだが、今回はどんなふう展開するのか、今日の搬入が楽しみ」とある。アーティストは自らを限定するタイプと、自分をコントロールしないタイプに分かれる。崔は博士課程を修了しながらも後者であり、確かに理性的で知的な画面だが、動物的な自己も抑えることなく縦横無尽に展開している。

崔の作品群を見て気がつくのは、素材の組み合わせである。紙、キャンパスにアキア、油彩、テンペラ、混合と、様々なパターンが生まれる。その都度崔は、描き方を換えている。これなら無限の試行錯誤を要する。そして描かれる世界は、自らが発光しても、外の光を反射することもある、見えない光を描くことに終始しているのだ。

